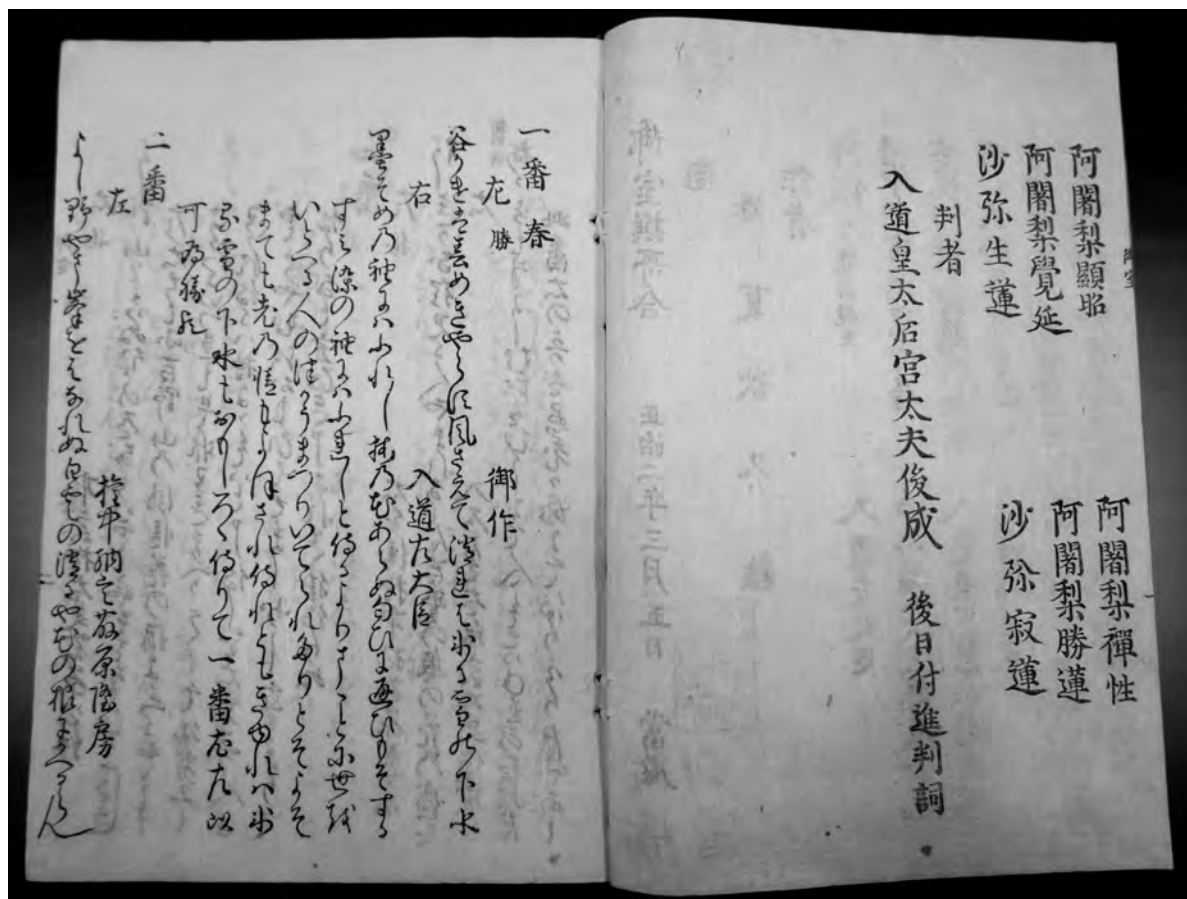


うた あわせ ぶ るい
歌合部類



『歌合部類』のうち『御室撰歌合』本文巻頭（判者は藤原俊成）

このリレー連載も今回で三八回目。コクブンケンの優品が代わる代わる取り上げられ、その書物としての要諦がそれぞれの執筆者によって情熱的に紹介されてきました。いわばサッカーに譬えるなら、FWばかりが居並ぶ感じだと言えまじょうか。でも、根っからの地味好きとしては、日の当たらないモノたちにももっと注目してほしい。キャビアやフォアグラだけじゃなく、地物のネギや大根にも温かな眼差しを注いでほしいと願います。

そのような立場から、今回は、マイナーだけれども当時にあつてはなかなか捨て置くことのできない、「いぶし銀」的な書物を取り上げてみます。

本書は、大本二〇冊の大部なもので、「部類」の名の通り、平安から室町期にかけての三六種もの歌合を集成したものです（「貞享二年」の刊記を持たない無刊記本だが初印ではない）。「歌合」というのは、詠者が左方と右方の二つのグループに分かれて和歌の優劣を競い合う、和歌行事の一つ。レフェリーを判者といひ、特に有名歌人がそれを務める場合、そのコメント（判詞）は大きな影響力を持ちました。だから三六種にも及ぶ歌合作品を収載する本書は、歌合史の概要を知るにはたいそう便利なものでした。絵も入っておらず、書物としては地味なことこの上ないものですが、江戸の人びとの〈教養〉の形成には大いに役立った、そういう書物です。

このような歌合や勅撰集（『古今和歌集』など）・私撰集・家集、あるいは物語（『伊勢物語』など）や随筆（『徒然草』など）等を含括して「歌書」と呼びます。そもそも歌書は、一にも二にも写本をもって上品とするのであり、刊本は常にその本文の質が問題視されてきました。けれども、貴顕ならばいざ知らず、大半のふつうの人びとは、歌書刊本によって初めて自在に学ぶことを獲得したわけですから、歌書刊本が〈知〉の基盤整備に果たした役割は極めて甚大なものがあつたと見なければなりません。

（神作研一）